

わたしの 世界の おすそわけ

Vol.7 アートに関わる方々のおすすめ本展示

2025年2月1日（土） - 2月28日（金）〔月曜休館〕

金沢市立玉川図書館 1F

本はいろんな世界の入口です。金沢で活躍しているあの人はきっと、いろんな面白い世界を知っているはず。本を通じて自分の知っている世界を少しだけおすそ分けしてもらえたら、ここを訪れる様々な方が新しい世界に出会うきっかけになると思います。もしかしたらその出会いが、未来の金沢で活躍する人を生むかもしれません。

今月は、アートに関わる方々におすすめの本を聞いてみました。是非手に取って、読んで、新しい世界に触れてみてください。

INFO T/076-221-1960 F/076-222-6938

上田 陽子

●金沢アートグミ・アートコーディネーター

『都市と星』 アーサー・C. クラーク／著 , 酒井昭伸／訳

はるか未来、人類が完全管理された都市ダイアスパー。そこで生きる人々はなにより変化を恐れるが、唯一外に興味がある主人公アルヴィンは、実際に壁を超えて外へ乗り出し、途方もない世界へ辿り着いて行く SF 冒険小説。アーティストと一緒に展覧会を作っていく中で、「自分たちがいいと思った道を信じて動けるか？」と判断していくことが多くあります。この小説は進歩主義すぎるくらいはあるものの、好奇心を信じ突き進んでいくその姿や物語のイメージから、勇気をもらいます。

『茶室空間入門』 船越徹／ほか著

茶の湯とは、作法だけが独立し、伝統として固定したものでもなければ、茶室も鑑賞の対象となる抽象化した空間ではないという事実を、茶人たち、建築家たちに想起してもらうために企画された本。古美術の仕事もしている自分が茶の湯を扱う展覧会を企画する時に、所作 HOWTO や日本礼賛の文脈ではないところで茶の湯を捉えている本を探していて出会いました。歴史や特徴、イメージする世界、所作のアルゴリズム、空間について考えることができるのでおすすめです。

『スポーツ/アート』 中尾拓哉／編

美術・写真・映像・身体表現など多彩な研究者、評論家、アーティストら 14 人によって様々な角度からスポーツとアートの接点をとらえる内容の論考オムニバスです。最近は、ゆるいランニングを趣味にしつつ日常と芸術の接点を考えてプロジェクトを企画しているので、スポーツとアートの接点も隔たりを改めて感じながら、スポーツをモチーフにアーティストがどう作品化しているかなど興味深く読みました。

田尻 典子

●旅する料理

『マップス』

アレクサンドラ・ミジェリンスカ、ダニエル・ミジェリンスキ／作・絵 , 徳間書店児童書編集部／訳
ポーランドの絵本作家による大判地図絵本。地理や歴史や建物や食べ物など、世界 62 カ国の様々な情報が、愛らしいイラストでぎっしり描き込まれています。西から東へ文化がグラデーションのように変容していく様もわかる、「魔法の絨毯のような一冊」。(なんとモロッコのページもあります。是非ご覧ください)

『谷川俊太郎詩選集 1』

谷川俊太郎／著 , 田原／編
出会いは小学校の国語の教科書。地球は球体で絶えず回転していて、地上には多様な文化と今を生きる人が在ると教えてくれた、大切な詩です。この詩と出会わなければ、旅する料理は生まれていなかったでしょう。(日本が寝静まる夜更け、ふとこの詩が浮かび、iPhone の世界時計を眺めます。「地球の裏側のあの街は今頃真昼で、この瞬間を精力的に生きている人がいる」そう思うと孤独感が少し薄れるのです。)

『MOROCCO STYLE』

Christiane Reiter／写真
世界にはこんなに格好良いインテリアがあるのか！モロッコで衝撃を受けました。ダイナミックな色の掛け算、重なる紋様、莫大な時間と労力をかけて作られた贅沢な手工芸品、躍動感溢れる配置。ヨーロッパ文化とアフリカ文化とイスラム文化が混在する「モロッコの美」が、凝縮しています。お手に取ってご覧いただけたら幸いです(大好きな玉川図書館でモロッコの本を展示していただき、とても嬉しいです。感謝。)

渡辺 秀亮

●石彫家

『以下、無用のことながら』 司馬遼太郎／著

言わずと知れた歴史小説の大家である司馬遼太郎氏だが、エッセイや対談集も非常に多くの作品があり、若かりし頃から楽しませてもらってきた。この本には 71 篇のエッセイが収録されていて、ジャンルも多岐にわたり雑多な感じもするが、それもまた魅力の一つである。新聞記者時代の経験からくる、美術や宗教ネタの文章は非常に読み応えがあり、時代を感じさせる部分といつまでも色褪せない部分が同居していて、自分が何歳の時に読んでも楽しませてもらえる。

『中国五千年 (上、下)』 陳舜臣／著

代表作である中国の歴史や小説十八史略など、中国史をあつかった小説を数多く執筆している陳舜臣氏だが、上下 2 巻に古代から近代までの中国王朝の興亡を中心に中国史が網羅されており、中国通史の入門編としても非常にオススメ。若干の駆け足感はあるが、この本の読後に長編作品のチンギス・ハーン一族や太平天国など陳氏の歴史小説を読むとより楽しめるようになるはず。

『井上ひさしと 141 人の仲間たちの作文教室』

井上ひさし／ほか著 , 文学の蔵／編

井上ひさし氏が本で作文を添削してくれるという、なかなか味わえないシチュエーションを体験できる 1 冊。本の中で原稿用紙形式の文章が出てきて解説してくれる展開が、読んでいるテンポもよく、デザイン的にも楽しくなってくる。まるで学生時代に先生に教わっている授業のように本はすすみ、最後の“仲間たちの朗読”を添削・講評してもらったあとには、自らも作文教室に参加し終えたような満足感を感じる。

黒澤 浩美

●キュレーター

『モンテレージョ 小さな村の旅する本屋の物語』 内田洋子／著

モンテレージョはトスカーナ州の小さな村です。何世紀にもわたって、村の人々が本の行商で生計を立て、籠いっぱいの本を担いでイタリア中を旅したとのこと。その後、各地に書店が生まれ、「読む」ということが広まったというから、本屋の原点とでも言いましょうか。この本は内田さんが、わずかに生存している子孫たちから話を聞いたノンフィクション。今よりも本が届くのが待ち遠しかった時代のお話です。

『バーバパパのいえさがし』

アネット・チゾン、タラス＝テイラー／作 , やましたはるお／訳
1970 年代から愛されるバーバパパのシリーズは、今読み返すと、今風の「丁寧に生きる」ということかなと思い当たります。自分たちで楽しく暮らす方法を探して実現する。読むたびにバーバパパのファミリーたちはデザイナーやアーティストのようだと思うのです。家づくりは専門家に任せて安心、何なら建売りセットだったら間違いないとか、思っていないか？ぜひこの本を参考に心地よい家づくりをしてみてはいかがでしょうか。

『寛容について』 マイケル・ウォルツァー／著 , 大川正彦／訳

「わたしの主題は寛容である。もうすこしうまく言えば、互いに異なる歴史・文化・アイデンティティをもつ人々の集団の平和共存、である。」いまだに絶えない戦時下で、悲しみや不安の中に生きる人々がいることが伝えられる毎日のニュースにはとても心が痛みます。「寛容」は普遍的な原理というよりも、差異を折衝する方法であるというのが、ウォルツァーの政治的実践です。誰かを傷つけずに生きるためのひとつの提案でもあります。

原嶋 空

●大学生（東京大学表象文化論専攻）

『ニッポン獅子舞紀行』 稲村行真／著

全国 500 カ所以上を巡った獅子舞研究者・稲村行真氏が、各地の獅子舞の魅力を語る。神聖かと思えば害獣と重ねられることもあり、地域性を反映して色々な顔を持つ獅子。上京し、初めて故郷の加賀獅子のユニークさに気がついてから、その虜になった私に刺さる一冊。効率化が進む時代に、人間らしさが最も光る「獅子舞」の世界に引き込まれること間違いなし。

『ヴィータ 遺棄された者たちの生』

ジョアオ・ビール／著,トルベン・エスケロウ／写真
桑島薫、水野友美子／訳

ブラジルの「ヴィータ」という保護施設を舞台に、社会から切り離された人々の姿を追う一冊。一人の女性・カタリナと彼女が書き溜めた「辞書」と呼ばれるノートを通じて、社会の構造的暴力や福祉の限界を炙り出す。生産性を基準に人間の価値が選別される現実が突きつけられる中で、読者は人間らしさとは何かを問い直される。冷静な分析と同時に、カタリナへの深い関与から、研究を超えた人間的な物語も展開されてゆく。

『歳月』 茨木のり子／著

恋に浮かれていた頃に母に薦められ、図書館で読んだ思い出がある。詩の深い愛とあたたかさに触れ、人目も憚らず泣いてしまった。亡くなった夫への想いを綴った詩集、悲しいものだけど、「二十五年かかって澄んだコンソメスープになりました」とあるようにとても美しく純粋に関係を紡いでいたことが伝わる。社会派で凜としたイメージの茨木が、こんなにも少女のような素直さで愛した相手の姿に思いを馳せたくなる一冊。

菊谷 達史

●アーティスト

『もう、家に帰ろう』 藤代冥砂／著

写真家の夫がモデルの妻を撮影した写真集。まだ iPhone も SNS も存在しなかった 2006 年。高校生の頃にジャケ買いしたのですが、人生で初めて「物体」としても気に入ってる書籍かもしれません。写真集ってなんとなく電子書籍では見る気が起きない気がします。本の厚みと重みがそのまま彼らの時間であるような。写真を撮ることも、つぶやくように言葉を添えることも、今より少しだけスペシャルな行為だった時代の写真集。

『ゲンロン 8 ゲームの時代』 東浩紀／編

哲学書や思想書の熱心な読者でない自分は、批評誌ゲンロンに対しても「難解で専門性が高いんだろうな」という苦手意識を抱いていました。けれどもそんな雑誌がビデオゲームを特集すると知り興味を持ちました。子供から大人まで夢中にさせる娯楽コンテンツであるビデオゲームが、世界や人類の歴史を読み解く上で、こんなにも有効なジャンルなのだと思わせてくれ、また、難しい事は面白い事の入り口なのだと思わせてくれた一冊です。

『南インド料理店総料理長が教える だいたい 15 分！本格インドカレー』

稲田俊輔／著

制作も生活も思うようにいかず、しかも新型コロナウィルスも流行し始めちゃった頃、この本に出会いスパイスカレー作りを始めました。美術と無関係に何かを作る事に夢中になるなんて、一体いつぶりの事でしよう。0.1g 単位で測れる電子計りを使ってレシピを忠実になぞる。すると必ず美味しい料理が完成する事への驚きと感動でばくの人生がかなり華やきました。ある意味アートを見る以上にもの作りの姿勢が正された一冊でした。

角島 泉

●花屋店主（花のアトリエ こすもす）

『木に学べ』 西岡常一／著

" 鬼 " と称された宮大工、西岡常一が語る、古の建築のこと。氏が手がけた法隆寺の大修理、薬師寺（金堂、西塔）再建の話。時代を遡るほど、職人たちの技術や感性が優れていたそうです。法隆寺が千年以上立ち続けているのは、飛鳥時代の工人たちが、木の生命を考えて取り組んだから。「木のクセを見抜いて、適材適所に使う」花を生ける時、ディスプレイする時に、いつもこの言葉がよぎります。命と向き合い個性をつかむと、花が輝き出すのです。

『天守物語』 泉鏡花／著

鏡花は、花をととても印象的に使います。特に異界の入り口には大抵、花が咲いています。天守物語は鏡花作品の中でも一番好きです。城の天守閣は魔物の住処。主の富姫と仕える者たちが美しい着物を着て暮らしています。腰元たちが、絹糸の先に朝露をつけて窓から垂らし下界に咲く秋の花々を吊り上げるシーンの美しいこと。戯曲作品なので、台詞のリズム、旋律がすばらしいのです。玉三郎さんは原文に忠実に、舞台化、映画化されていますが、それらも何度足を運んだことか。

『世界を変えたブランド広告』 杉山恒太郎／著

筆者ご自身が、広告史に残る名 CM を作ってこられた方ですが、世界の広告について造詣深く、分析も鋭く、膝を打つこと多しです。私は花屋になる前に 2 年ほど広告業界にいたのですが、その経験は今につながっています。一本の花の魅力を最大限引き出すには、どこを背景に、どの器に入れるか、と考えるプロセスが似ているからです。実は花そのものが、生命体を繁栄させるための看板、広告だ、という事もある時気づきました。

宮越 文美

●伝統工芸従事者・コーディネーター

『美術品移動史』

田中日佐夫／著

作品に出会う時制作者の人物像は気になるが、それと同じように関心を寄せるのはこの作品はどのようにして此处にあるのだろうかということ。私達が旅から感動を受け取るように、作品もまた人と交感しながら旅を続ける。共通の審美眼を育てた茶道具話には、当時の著名人の相関図まで折り込まれている。来歴に惹かれたならば、その作品を親に旅に出るのも楽しい。

『作家の酒』

コロナ・ブックス編集部／編

本書には文豪や映画監督の馴染みの店が紹介されている。彼らが一献傾ける時に好んで食した献立まで載っているので空腹では開かない方がいい。私は食に関して一言ある人を信用することになっている。そういう人は難しいようで、よく人の事を見ている、思いやりある人物だ。人と関わりながら独りの時間を愉しむことを知っている。その周辺にはきっと面白い出来事が酒瓶とともに転がっている。

『百日物語』 中谷宇吉郎／著

雪と氷の研究者である中谷宇吉郎氏の文章には、日常への愛が溢れている。憧れや夢、想像力こそ、新しいものを生み出す源泉だと気付かされる。また、国の内外を意識する姿勢に背筋を正される。今の世は情報飽和していて果たしてこれほど面白い時代なのかと少々疑ってしまうので、低空飛行するニュースに疲れた時、この見開き完結する先生の新聞連載集を読みたい。次女・芙二子氏は霧の彫刻家として作品発表していることも興味深い。

